

する協力や、紛争管理のための暫定措置の合意をめざすことであるとする（以上、終章）。

※ ※ ※

以上、煩を厭わず、やや長めに本書の内容を紹介したのは他でもない。国際法の専門家である著者による本書の尖閣問題に関する論述が、包括的かつ体系的であり、関連する重要な論点のほとんどを多角的に取り上げていることを示したかったからである。その論述はあくまでも周到かつ綿密であり、引用している国際判例などの諸資料も豊富である。

尖閣問題という、日中双方とも一般世論においてはとかく感情的な判断や反応に走りがちであるが、紛争の平和的解決を志向する限りは、客観的な事実裏付けられた冷静な判断が求められるところである。

本書は一般読者向けの書物というよりは専門書の範疇に属すると言ってよいものであるが、客観的な事実裏付けられた冷静な判断のために有益な基準ないし指針を与えてくれるという意味では、日中両国の真の意味での友好を希求し、尖閣紛争を、武力ないしその威嚇による手法に頼るのではなく、あくまでも平和的な手段で解決していくことを切に望んでいる心ある人々にとって、大いに参照されるべき書であるといえよう。

良くないぞ！日本の民主主義 『これでいいのか！日本の民主主義 失言・名言から読み解く憲法』

弁護士 川津 聡

これでいいのか！
日本の民主主義



名書だ！という読後感でした。

権力を握った者は、自らに都合の良い言葉しか口にしないことが本書を読むとよくわかります。

そして、都合が良いだけの言葉だと理解して指摘するには、その言葉に関連する多くの事実を正確に掴む必要があるということもよくわかります。

本書が取り上げる失言・暴言は、いずれも立憲主義や基本的人権、民主主義などの憲法上の重要な原則を軽視あるいは敵視しているか、そうでなければ根本的に理解が不足していることを示すものばかりです。

その大半が安保法制の国会審議が行われていた時期に集中しており、現政権の立場で安保法制を語ること、制定することがいかに憲法を踏みこむ行為であったか示唆に富んでいました。

思い返すと、よくまあ、これだけあったものです。章題とされた失言・暴言以外にも、関連す

るものが本文中に掲載されていますが、これだけあると逆に個別の失言・暴言はなかなか覚えていられないので、それらを集録記録しただけでも、価値のあることだと思います。

とはいえ、それらが「なぜ」失言・暴言なのか、を的確に指摘して批判することは、実は大変なことです。

私見ですが、これは失言・暴言を吐く現政権の中枢メンバーたちの政治思想やその前提となる事実認識は現憲法の立脚する思想や事実認識と余りに異なっており、議論の土台となる共通認識が極めて乏しいためではないでしょうか。

国際法律家協会の会員が執筆者である章だけ見ても、「徴兵制はありえない」とか「自衛隊発足以降、……1800名の自衛隊員の方々が、……殉職をされておられます」とか「たいていの憲法学者より私は考えてきた」とか、聞いて呆れてため息は出るけれど、本質を捉えた的確な批判がとっさに出てこないものばかりでした。

本書は、そんな失言・暴言が発せられた状況や前後の文脈を丁寧に確認した上、共通認識が乏しいために、批判に際して遡って言及する必要がある基礎的知識までも解説してくれます。

現憲法を巡る現在の政治状況を学ぶ上で必要な知識がコンパクトにまとまっており、講師活動などでも利用できる場面がある利便性の高い書と言えるでしょう。

また、安保法制の審議が行われた時期と前後して、失言・暴言があった反面、現憲法の思想や事実認識を深く理解し、それを踏まえて発せられた名言も多く生まれました。

本書の第2部は、それら名言を題材としています。

安保法制に反対するIADLの声明中の一節、米軍基地問題に対する翁長沖縄県知事の発言、マイナンバー制度に対する日弁連会長声明など、本書は、こちらも失言・暴言と同様に文脈や前提知識を解説し、なぜそれが名言であるのか、深く納得させてくれます。

ちなみにIADLの声明に関しては、それを国際法律家協会として日本国内向けに発表する様子の写真が掲載されていますし、IADLの紹介もされています。

さらに、本書は、第3部として平和と民主主義を守るための行動に出た市民たちからのインタビューまで掲載しています。

その相手も、「憲法9条にノーベル平和賞を」から国法協会員でもある鷹巣直美さん、「安保関連法に反対するママの会」から西郷南海子さん、「SEALDs」から高野千春さん、本間信和さんと極めて豪華です。

私は、「SEALDs」メンバー2人のインタビューを読んでいて、学術的な言葉がたくさん出てくることに驚きました。こういう分析のできる方って、傍観者的な立場を好むんじゃないかという偏見（ほんと、ごめんなさい）がありました。

この本を、2016年7月の参議院選挙に間に合わせてくださった執筆者の皆様には感謝したいと思います。もちろん、参議院選挙が終わった後も、現政権が憲法に関連して発する言葉の軽さについて考えるために、必読の一冊です。